

横綱羅皇 全勝で連覇

加古川紙相撲新聞

2023年(令和5年)

12月22日

第20号

発行所：兵庫県加古川市北在家
加古川紙相撲新聞社

第16回
紙相撲本場所
幕内優勝

横綱(全勝) 羅皇

(4回目)

殊勲賞 関脇 菊千代
敢闘賞 頭頭 天狗岳
熱戦賞 前頭 照葵

駒響との楽日決戦制す

第十六回加古川紙相撲本場所十一月二十二日初日は十二月十八日に千秋楽を迎え、横綱羅皇(岩ノ城)が全勝対決で横綱駒響(西の国)を取り直しの末に下し、二連覇で四度目の優勝を飾った。羅皇は先場所からの連勝を二十二に伸ばし、駒響の記録に並んだ。横綱の優勝は第七回本場所の横綱由加山以来九場所ぶり。三賞は殊勲賞が関脇菊千代(万寿山)、敢闘賞は前頭四天狗岳(万寿山)、熱戦賞は前頭十四・照葵(岩ノ城)が受賞した。幕下は大熊(南の海)、序ノ口は若乃(杉)今出川が優勝した。

取り直しのアナウンスが流れると、場内のウォルテージは今場所最高潮に達した。新横綱二人による全勝対決となった千秋楽結びの一番本割りで、駒響が渾身の相撲で羅皇を横転させ、一度は軍配が駒響に上がったが、さす物言いがついた。土俵下で羅皇と駒響が見守る中、長い協議が続いたが、結局取り直しになった。取り直しの一番は羅皇が盤石の相撲で駒響を寄り切り、ここに二場所連続の全勝優勝が決まると同時に駒響の持つ最多記録「二連勝」に並んだ。駒響は惜しくも第十一回本場所以来の二度目の優勝はならなかった。



取り直しの末、羅皇が駒響を破り、二場所連続の全勝優勝を達成

内容だった。とにかく今の羅皇を横転させるのはこの人しかいないだろう。この悔しさをバネにして来場所はぜひとも雪辱を果たしてもらいたいものだ。

微妙な判定!?

本割りの一番は駒響が渾身の喉輪押しで羅皇を横転させた。軍配は西に上がり、駒響の優勝が決まったかと思えたが、さす物言いがついた。ヒデオで確認すると、羅皇は横綱しになりながらも左から掛っており、駒響の左手が土俵をはっていているように見える。長い協議の末、羅皇の体が落ちるのと駒響の手が付くのが同時と見て取り直しという判定になった。この一番について羅皇は「自分が負けたと思った。取り直しになってラッキーだと思ったよ。一方、駒響は「手が付いたかどうかはわからなかった。軍配を見てやっと思ったが、取り直しになって気持ち揺らいでしまった。……と振り返った。この微妙な心境の違いが次の一番に多少なりとも影響したの



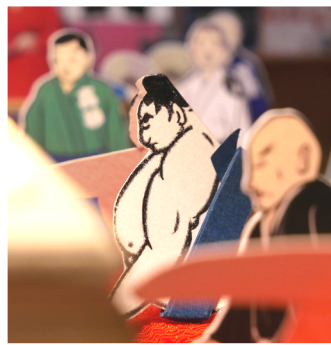
微妙な判定だった本割りの一番

かもしれない。取り直しの一番は立ち会いから羅皇の左がスパッと入り、一方的に向正面に寄って出て、勝負はあっけなく決まった。駒響としては一度受けた勝利の軍配から取り直しまでに気持ちの切り替えができなかったことが敗因なのだろう。今場所は新横綱で全勝対決という最高の盛り上がりを見せた。両者が立派に横綱の責任を果たしたことは間違いない。

心配な横綱紫電改と大関大木戸

もうひとりの横綱紫電改は初日、二日目と連敗スタート、その後もなかなか本来の調子が戻らず六勝五敗という惨憺たる結果に終わった。師匠の岩ノ城親方は心配そうにこう語る。「下半身に粘りが無い。立ち会いから受け身になっていて、相手の攻撃に防戦一方になる場面が目立った。先場所の如月戦で痛めた腰が良くないようだ。」その言葉の通り、立ち会い沈み込んで相手の中に入ってから怒涛の寄りという形がほとんど見られなかった。しかし不振の原因は怪我のせいなのか、井上相談役のコメントはもっと悲観的だ。「もう紫電改に多くは期待できないだろうね。はっきり言って新大関で全勝した時が彼のピークだったんじゃない。何とか横綱にはなっただけ、今場所を見る限り力の衰えは覆いようがない。来場所も厳しいだろうね。」

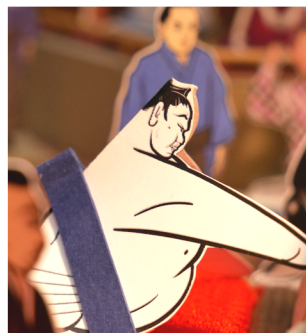
由加山の引退後、加古川紙相撲界の第一人者として引張ってきたのは紛れもなく彼である。なんとかもうひとりと花咲かせてもらいたいものだ。



不振だった横綱紫電改はその表情も冴えない

そして大関大木戸も苦しい土俵の終始した。初日からまさかの三連敗、中盤でなんとか星を五分に戻したものの、横綱の羅皇と駒響にはまったく歯が立たず、屈辱の負け越しに終わった。大木戸自身は「うーんと生返事を繰り返すだけだった。が、師匠の小松島親方はこう語る。「自分の相撲に迷いがあるようだ。大関としてどういう相撲を取ればいいのか考えているうちに消極的になってしまっている。元来責任感が強

い男なんだが、それがマイナスになっている。」大関として申し訳ない……と支度部屋でも言葉少なだった大木戸。来場所はガト番を迎えることになった。大関に昇進するまでは立ち会いから有無を言



打ち続く敗戦に大木戸の表情も暗い

イノウエマイ

今年最後の本場所を飾るにふさわしい盛り上がりだったね。新横綱の二人が全勝で楽日決戦なんて豪華過ぎるよ！ いやー、堪能した！今場所を見る限り、羅皇と駒響の時代がしばらく続きそうだね。二人の牙城を脅かす存在が現れるかが今後の焦点になりそう。日本紙相撲協会からやって来た四人、特に稽古場では無敵の徳鵬がどこまで上がってくるのかが注目している。来年の楽しみは何と言っても日本紙相撲協会との交流だ。さっそく四人の力士を派遣し、新弟子検査で二名があらう土俵に上がる予定になっている。来年のことを考えるとうフワフワが止まらないよ。それではみなさん、加古川紙相撲協会を今後ともよろしく、良いお年を！

元気バクハツ！
カロナミンC
ドリンク
加古川製薬グループ